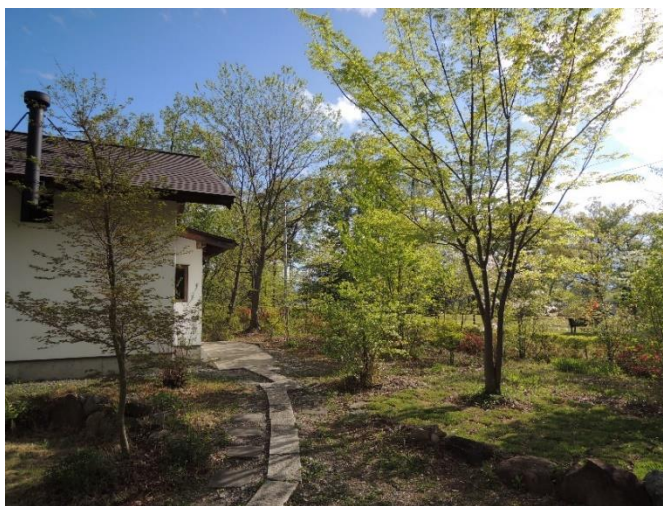


## 御国の扉が広くひらいている季節

牧師 山本 護

神の息(霊)が薫風(霊)として礼拝堂を吹き抜け、それが私たちの讚美となる。それから礼拝の讚美歌は庭に流れ出、木々や草花や鳥たちが声を合わせ、神を讃えて響き合う。そんな聖霊の循環を思い描いていると、建物も、石垣も、物置の箒一本までが神を讚美していると感じられ、気にも留めなかった隅々までもが愛おしくなります。



ファリサイ人が神の国の到来時期を問うと、イエスはこう答えます。

「神の国は、あそこだ、ここだと、君たちが期待している枠では来ない。それでなんと言えばいいかな、神の国だったら、ほら、もうここにあるじゃないか(ルカ 17:20~21 私訳)」。

文脈やイエスの人格を想定し、原典の前置詞も丁寧に読んだら、「神の国だったら、ほら、もうここにあるじゃないか」という気さくな訳になりました。新共同訳は「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」とやや直訳的で重厚。「あなたがたの間にある」神の国だとすれば、キリストの体である「私たち」すなわち教会に「ある」のでしょうか。それとも単に今、イエスが共におられる状況での「私たち」なのでしょうか。あるいはまた、私たちの「心の内」とも、「手の届く領域」とも読みうる、膨らみのある文言です。

妙好人(浄土真宗の敬虔な信徒)石見の才一(1850~1932/嘉永 3~昭和 7)は、生業である下駄作りの鉋屑に、思いついたことを即座に書きつけていました。このような言葉を。「才一や何処におる 浄土貫うて娑婆におる これがよろこび なむあみだぶつ」。世にありながら神の国にいるというこうした感覚を、浄土真宗の教理的な言葉で「現生正定聚」と呼ぶらしい。読み解くと、「生きている今ここで仏との同時性の真実をいただき、その実感の上で暮らしの一つひとつを大切におこなう」ことのようにです。

「なんとと言えばいいかな、神の国だったら、ほら、もうここにあるじゃないか」。このイエスの言葉が石見の才一の素朴な往生と相まって、神の国をいっそう身近に感じさせてくれます。だから私たちも暮らしの一つひとつを大切に慈しみ、礼拝では神の薫風をこの肌感じて、讚美歌をうたって応えます。そして何気なく礼拝堂の窓の外に目をやってみると、庭の木々が静かに揺れながら共にうたっている。

確かに、神の国はここにある。五月はそれが分かりやすい入門の季節です。一方でまた、それゆえに「五月病」が発症する危うい時期なのかもしれません。Ω